魔法少女リリカルなのはStrikerS チートな介入者

AsuraCryin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　チートな介入者

【Ｎコード】

Ｎ７６８４Ｊ

【作者名】

ＡｓｕｒａＣｒｙｉｎ

【あらすじ】

この物語りは神様のちょっとした『ミス』から始まった物語

始めに……（前書き）

初めまして作者のＡｓｕｒａ＿Ｃｒｙｉｎと申します

いきなりですがまずは謝罪を

この作品は作者の妄想を文章にしてみた作者の自己満足作品になっています

本当にすみません

それでも見てくれる方は

心からの感謝を

始めに……

ある日突然、俺は死んだ。
死んだ原因は神様のちょっとした『ミス』だった。
死なしてしまったお詫びに貰ったものは第二の人生とチート過ぎる能力。
そして、第二の人生を歩むために選ばれた舞台は『なのは』の世界だった

※この物語りはオリキャラが介入する作品です。オリキャラが介入するなんて嫌だと言う人は見ないことをオススメします。ちなみに作者は初心者で文才の無いダメな凡人です。それでも見てみようと思う方は広い心で見てってください。

始めに……（後書き）

ただの勢いだけで書いてしまった事を謝罪します
本当に申し訳ありませんでした

始まりは突然だった（前書き）

駄文で本当にすみません

始まりは突然だった

俺こと神裂（カンザキ）　湊（ミナト）は今、少し混乱している

なぜ混乱しているのかと言うと

俺はバスに乗っていたはずなんだが、気がついたら辺り一面真っ白な世界に立っていたからである

これは夢か確認するためベタだが一番簡単な方法である頬をツネるをおもいっきり強く実行したりした

結果、夢ではなく現実だと嫌でも認めるしかなかった

でもそうなるとこの場所は何処なのか？どうやって俺はここに来たのか？といった疑問の渦に入ってしまったためである

考えるのに疲れた湊は、なんとなく誰か居るか声を出すことにした

「誰か居ませんかぁー！！」

もちろん返事が返ってくる事は無いと思い、また考え始めた瞬間

「呼んだ？」

「うわっ！？」

後ろから返事が返ってきた

ビックリした湊はその場から少し飛び退き、声の主を見た

声の主は湊と同じ位の美少女だった

「あ、ゴメン。驚かしちゃった？」

美少女が湊を驚かした事を謝ってきた

「あ、いや。少しビックリしただけだから別に謝らなくて良いよ」

少しみとれていた湊は我に帰り、気にしていない事を伝えると

美少女は微笑みながら言ってきた

「許してくれてありがと。それとちょっと聞きたいんだけど、君の名前は神裂　湊であってる？」

「あってますけど……どうして俺の名前を？」

少し美少女を警戒しながら聞いてみると

「それは私が神様だからだよ」

「はぁ？」

とんでもない事をぬかしやがった

「あの～俺の聞き違いでなければ今、神様とおっしゃいましたか？」

湊が確認を取ると

美少女は愉快そうに答えた

「聞き間違えじゃ無いよ。本当に私は神様なの、私が神様だとこの場所の説明もしやすいと思わない？」

湊が確かに説明がつくと考えていたら、ある可能性に気がついた

「えっと、自称神様？もしかして俺って死んだのか？」

「自称ってところが気になるけどそれは置いといてあげる。確かに貴方は死んだ」

「じゃあ、このパターンで行くともしかして神様のミスで俺って死んだの？」

なんとなく予想できた事を言ってみると神様は恥ずかしそうに頷いた

「貴方を死なせてしまったお詫びに貴方に第二の人生を与えますね」

「と言うと俺が居た世界とは別の世界で生きることになるのか？」

「そうなりますね。貴方が暮らしていく世界の希望はありますか？」

神様が希望はあるか聞いてきたのでなるべく面白そうな世界が良さそうなのでふと浮かんだ世界に決めた

「じゃあ、『なのは』の世界で」

「分かりました。では他に何か願い事はありますか？」

「俺の容姿を変えることは出来る？」

「簡単ですよ。なりたい自分をイメージすればいいんです」

神様に言われたとうり目を閉じイメージする

髪は漆黒で腰までの長さ

目は翡翠色に

少し顔をカッコよく

イメージしていくと次第に体に違和感を感じたがすぐにおさまった

「もう目を開けても良いですよ」

神様に声を掛けられて目を開け、髪を確認するとしっかり長くなっていた

「よし、大丈夫みたいだな。神様、他にも願い事を聞いてくれる？」

「えぇ、構いませんよ」

「じゃあ、俺の魔力を無限とかって出来る？」

「はい、出来ますよ。私的には貴方が知っているマンガ、アニメ、小説の能力、技を使えるようにするでも構いませんよ？」

「神様が良いって言うならそれと、俺の専用デバイスだけ貰えればもう十分です」

「デバイスですね……はい、どうぞ」

神様が手を前に出すと弓兵が描かれたブレスレットが現れた

「これであちらの世界に行く準備は整いましたね。では、今から貴方をあちらの世界に送りますね」

「はい、ありがとうございました」

湊は神様に深々と頭を下げた

「さようなら、湊」

神様がそう言うと湊は光に包まれていった

その時、湊が感じたのは妙な浮遊感だった

第一話：落ちてきた介入者（前書き）

どうもＡｓｕｒａ＿Ｃｒｙｉｎです

私は今、勢いで小説を書き始めたことに後悔をしております

ま、反省はしませんけど

なんだかんだ言いながら書いたこの駄作を見ていただいている皆さんに心からの感謝を

では第一話をどうぞ

第一話：落ちてきた介入者

初めまして私の名前はフェイト・T・ハラオウンです

機動六課のライトニング分隊の隊長をしています

今私は停止したリニアレールの車両の屋根に居ます

私の他には同じ分隊の仲間であり、家族のエリオとキャロ

私の親友の家の末っ子のリインが居ます

私達がここに居る理由は現地の局員に事後処理の引き継ぎを行うため

今私はここで何があったのかのデータを事後処理の人達が見やすいようにデータを整理しているところです

データを整理しているといきなり通信が入ってきた。どうやら全体通信みたいだ

『ロングアーチから緊急報告ッ！！現場からおよそ北西に五キロの地点に小型の次元震を観測！次元震発生直後に一瞬ですがオーバーSランクの魔力を感知！そして、現地の観測隊からガジェット・ドローン二型が次元震観測ポイントに向かっている見たいです』

そこで画面が変わり茶色の髪で前髪に赤い髪止めを二本した女性が映る

『と言うことなんやけどフェイトちゃん、頼める？』

「了解。これよりライトニング０１は次元震観測ポイントに向かいます」

《Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ》

そして私は飛び立った

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

湊ｓｉｄｅ

只今絶賛落下中♪

《マスター、現実を受け止める事をオススメするぞ》

「はっ！？そうだった！今はこの状況をなんとかしないと――」

流石にヤバイと感じ力を使おうとしたが

「――って！使い方が分からねぇぇぇ！？」

使い方を知らなかった

《マスター、私を使えば良いんじゃないのか？》

湊が落ちながらも器用に天に吠えているとデバイスが言ってくる

「あ、そうだった。お前が居たんだよなゴメン、混乱してて忘れてた」

デバイスに謝りながら右手のブレスレットを撫でる

《今はそんな事は置いといて目の前の事に集中した方が良いと思うが？》

まったく世話が焼ける、と言う感じにデバイスは溜め息をついた

「分かった。まずはどうすれば良いんだ？」

《私の名前を決めること、次に戦闘服をイメージしろ》

「了解。じゃあ、お前の名前はアーチャーだ」

《デバイス名［アーチャー］を登録完了、次にバリアジャケットを構築開始》

アーチャーに言われた通りにバリアジャケットをイメージする

イメージするのはＦａｔｅの英霊エミヤの礼装

《バリアジャケット構築完了。マスター、準備完了だ》

「よし、アーチャー！セットアップ！！」

《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ！》

アーチャーが言うと湊は白銀の光に包まれた

光が消えると湊の服装がさっきイメージした通りの礼装に所々銀色のラインが入った物になっていた

「アーチャー、次は？」

《後はマスターが念じるだけで出来る》

「なら、黒鐵の重力制御！」

湊が言うと落下は止まり宙に浮いた状態になった

「ふぅ……やっと止まった」

額の汗を拭きながら安堵の溜め息をもらしていると

《マスター、どうやら休む暇は無さそうだぞ》

「へ？」

アーチャーの言った意味が分からず聞こうとした刹那

青い何かが左頬を掠めた

ツーと頬から血が垂れるのを感じながらアーチャーの言っていた意味を理解した

「さっき手に入れたばかりの力で即戦闘って……不幸だ」

《何をぶつぶつ言っている。来るぞ！》

アーチャーが言い終わるなりガジェット・ドローン二型が一斉に攻撃してきた

「アーチャー！武器は！」

《使いたい武器をイメージしろ！そうすれば使える！》

「考えてる暇は無い……なら、己を信じて突き進むまでだぁ！。来いっ！空圧式退魔刀“舞蹴（マイケル）レボリューション”！！」

頭に浮かんだ武器をとりあえず呼んでみた

すると、左手に鞘に収まった日本刀が現れた

それの特徴は刀身から柄までが一本の鉄で出来ている

そして、もう一つの特徴は――

「一撃で決める！」

湊は居抜きの構えをとる

その状態で舞蹴に圧倒的な魔力を注ぎ込む

「喰らえぇぇぇぇ！！」

鞘に付いているトリガーを引く

ズバァァァァァ

宣言道理一撃でガジェット二型を消し飛ばす

――空圧によって鞘から放たれる一撃には通常の三倍の速さと威力がある事

「はぁ……はぁ……これで…休めるよ…な？」

舞蹴を鞘に納めながら聞く

いくら魔力が無限に有っても初めての戦闘でとてつもない量の魔力を使ったため、湊は肩で息をしていた

《ガジェットの反応はもう無いぞ》

「良かった、これで――――」

ガシャ

――休めると湊が言う前に背中に何かを突き付けられる音がした

「俺に何か用かな？」

とりあえず後ろに居る人に話し掛けてみた

「貴方はここで何をしていたんですか？」

「いきなり見知らぬ場所に居て、気が付いたら自立型ロボットに襲われたから撃退しただけだが？」

俺がそう言うと後ろに居る人は突き付けていた物を下げた

「もしかして、貴方はここが何処だか知らないんですか？」

湊はその声を聞きながら振り返る、そこには金髪の美しい女性が居た

「ああ、オマケに知識はあるんだが記憶がなくなっているみたいなんだ」

湊は後の事を考え、少し嘘をつく。それを聞いて女性は驚いた顔をし、何かを考えた後何処かに通信を繋げて何かをやり取りした後こう言ってきた

「しばらくの間貴方を私の部隊で保護する事になりましたがよろしいですか？」

「ああ、よろしく。それと名前を教えてくれないか？ちなみに俺の名前は神裂湊だ」

「私の名前はフェイト・T・ハラオウンです。よろしくね神裂さん」

「よろしく。それと俺の事は呼び捨てで構わない。その代わり貴女の事はフェイトって呼ぶからさ」

「分かった。じゃあ、改めてよろしくね湊」

フェイトはそう言いながら手をさしだしてきた

「ああ。よろしくな、フェイト」

俺はフェイトの手をとって笑いながら握手した。すると

ボン！！

そんな音が聞こえてきてもおかしくない程に顔が真っ赤になって少し俯いていた

「お～い、大丈夫か？」

フェイトの顔を下から覗きながら言うと

「ッ！？だ、だだ、大丈夫！なんともないよっ！！」

ビックリしたのか、少し後ろに下がり、なんか慌てながら言ってきた

「そ、それより、迎えが来たみたいだから行こ！」

こちらに向かって来るヘリを見つけた瞬間、フェイトは逃げるようにヘリの方に飛んでいってしまた

俺、何かしたか？

第一話：落ちてきた介入者（後書き）

今回出てきた武器について

今回出した武器は『喰霊』から
六巻で弐村剣輔（ニムラ ケンスケ）が手にいれた刀
空圧式退魔刀
舞蹴（マイケル）レボリューション

この刀を打ち上げた刀匠
マイケル・小原が言うには
『霊力（魔力）を操れれは更なる力が覚醒する』
らしいです

第二話：機動六課と介入者と戦闘狂と（前書き）

作者のＡｓｕｒａ＿Ｃｒｙｉｎです

こんな駄作を今回も見ていただきありがとうございます

では、どうぞ

第二話：機動六課と介入者と戦闘狂と

あれからフェイトの後を追うようにヘリに乗り込んだら子供が二人、小人が一人、竜が一匹、に遭遇。

その際、つい口が滑り「小人？」と言ってしまい、リインが「リインは小人じゃないです～！！」と言いながら頭をその小さな手でポコポコ叩かれ、しまいには「しばらくの間、湊さんの頭の上をリインのベットにしてやるです！」なんて事を言われ。

今は俺の頭の上でのんびり寝っ転がっている状態である

「ところでエリオ、キャロ。今から行く機動六課ってどんなところなんだ？」

お互いの自己紹介をした後、湊が頭にリインを乗せたまま赤髪の少年と桃色の髪の少女に聞く

余談だが、俺がしばらく機動六課にお世話になることを話したら、エリオとヴァイスが物凄く喜んでいた

まぁ～六課の男女比は圧倒的に女の方が多いからな

うん、お前たちの喜ぶ気持ちはよ～く分かる

「えっとですね。海のすぐ側に建っていて、周りが静かで……」
「皆さんとっても優しくて、ご飯も美味しいところですよ」
キャロとエリオが交互に言った中の一部を聞いた瞬間
ギラン！
と眼が輝いた
「エリオ、六課には食堂があるんだよな？」
「え？あ、はい。ありますけど……湊さん、今眼が……」
「キャロ、食堂の厨房はどんなんだ？」
「へ？あ、えっと、普通の厨房よりは大きくて、設備は最高水準で用意したと聞いてますけど……それよりあの、湊さん眼が……」
「おい、フェイト。六課の部隊長か料理長に厨房を使わせてくれるよう交渉しててくれないか？」

「え？別に良いけど……なんで？」

湊の顔を見て少し頬を赤く染めながら（湊は気づいていない）
厨房を借りたがっている理由を聞く

「いや～たださ、これからお世話になる皆に俺の料理をご馳走しようと思ってな」

俺がそう言うと、フェイトは納得してくれた

そんな他愛もない話をしていたらいつの間にか目的地に着いていた

「あれが機動六課だよ」

フェイトに言われて窓から外を覗くと立派な建物が見えた

「へぇー、結構大きいな」

「そうかもね、他の部隊よりは少し大きいし」

ほぉー、やっぱり六課の後見人に友人が居ると多少の無理は通るのか

そんな事を考えているとヴァイスが着陸しますよ～、と軽い感じで言ってきた。流石は操縦士のＡライセンス保有者

「じゃあエリオ、キャロ、お疲れ様。通常勤務に戻って、しっかり休むんだよ？」

「はい！それでは僕達は通常勤務に戻ります。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

元気よくフェイトに返事をして建物の中に駆けていく二人

やっぱりまだ子供だなぁ～、と思った

「それじゃあ、今から部隊長に会いに行くから付いてきてね」

そして俺達も建物の中に入った

機動六課部隊長室

「部隊長、保護した方を連れてきました」

『ど～ぞ～』

フェイトがモニター越しにはやてに連れてきた事を言うと中から入室許可の声が聞こえてきた

「はやて、連れてきたよ」

「おおきにな。まずは自己紹介からやな、ウチの名前は八神はやて言います」

「俺の名前は神裂湊だ、好きなように呼んでくれ」

「なら、ウチの事ははやてって呼んでな」

「ああ、よろしくはやて」

そう笑顔で言うと

「っ！？～～～～ひ、卑怯やでその笑顔／／」

はやてが明後日の方向を向き、何かを呟いていた

なんか顔が赤いのは気のせいか？

「クスクス。はやてもそれには耐えられないみたいだね」

「なんの話だ？」

俺が少し首を傾げながら聞くと

「そ、それは秘密／／」

また顔を赤くするフェイト、なんで赤くなってんだ？

俺がそんな事を思っているとはやてが聞いてきた

「さてと、湊君は魔導師なん？」

「いちょうそうみたいだぞ」

「じゃあ、この時使ってたこれは君のデバイス？」

はやてが空中に半透明のモニターを出して見せてきた

お、あの時出した舞蹴を振り抜いた後の映像だな

今気付いたが何故かカートリッジシステムがくっついているんだ？

「いや、違う。あれは俺のレアスキルだ」

「どんな能力なんや？」

「そうだな。説明するより見てもらった方が早いな」

そう言うと湊はフェイトのデバイスの名前を聞いてから右手を横にかざし言う

「バルディッシュ」

すると横にかざしていた右手にフェイトのデバイスのバルディッシュが収まっていた

「えっ！？バルディッシュ！！」

フェイトは慌ててしまってある自分のデバイスを確認する

「あれ？バルディッシュはここに在るのになんで？」

「あははは、ビックリさせてごめん。これは偽物だよ」

今まで黙っていたはやて聞いてきた

「もしかして湊君のその能力は見たものを作り出す力なん？」

「正解。名前は『投影』能力は見た物を作り出す事が出来るんだ。ただ、このデバイスみたいにＡＩが入っていたりしている物は完全には作り出せないんだ」

「それじゃあ、この刀は……」

「ああ、俺が作り出した複製品さ」

それらを聞いてからはやてが少し考える素振りを見せ、何かを決心したのか俺に話しかけてきた

「あんなぁ湊君。出来ればウチに力を貸してくれへんか？」

「良いぞ～」

「そうか、やっぱり駄――――って！即答っ！？」

「そこまで驚くことか？」

「ごめんね湊。はやてはエセ関西人だから」

「あ、そう言うことか。納得納得」

「そこっ！納得しない！そしてフェイトちゃん！？何処でそんな言葉覚えたんや！」

「え？母さんが『はやてさんみたいな人をエセ関西人って言うのよ』って……」

「あの甘党王があぁぁぁぁぁ！！」

はやてが暴走し出したので、湊の頭の上で寝ていたリインを起こし、はやての事を任せて（押し付けて）フェイトと一緒に部隊長室を出た

「今日は疲れてるだろうから皆に紹介するのは明日にするね」

あの後、フェイトが部屋に案内してくれて今日は休むように言ってきた

「じゃあ、お言葉に甘えるとするよ」

流石に初めて魔法を、しかも高威力の魔法を放った為結構疲れているのだ。ここはしっかり休んでおきたい

「うん、お休みなさい」

「ああ、お休み」

フェイトが行った後、部屋に入りベッドに倒れ込んだ。そして深い闇に意識を手放した

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

次の日

リインｓｉｄｅ

休憩スペースで勤務日誌をつけているリイン

［５月１３日．部隊の正式稼働後初の緊急室動がありました。密輸ルートで運ばれたロストロギア［レリック］をガジェットが発見、輸送中のリニアレールを襲撃、それを阻止、レリックを回収すると言う任務でしたが六課前線メンバー一同の活躍もあって無事に解決。

確保した刻印ナンバー9のレリックは現在中央のラボにて保管、調査中。

初任務としてはまず問題ない滑り出しだ、と部隊長のはやてちゃん、六課の後見人騎士カリムやクロノ提督達も満足されているようですと」

日誌をつけていると声を掛けられた

「リイン曹長〜〜〜〜」

「ん？あ、シャーリー！」

「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分。個人的な勤務日誌をつけてたですよ〜♪」

そう言いながらモニターを消してシャーリーの目の前に飛んでいく

「なるほど」

「シャーリーは？」

「新しいデバイス達の調子を見に訓練所の方に行ってきたんですよ」

「そうですか。皆元気でした？」

「はい！ＦＷ陣もデバイス達も、もう絶好調♪」

そんなことをシャーリーと話しているとフェイトさんからの念話が

入った

《いきなりでゴメンなんだけど、湊を訓練所の方に連れてきてくれないかな？》

《任せてくださいですよ♪》

《うん、お願いね》

そう言うと念話を切る

「どうしたんですか？」

急に笑顔になったのでシャーリーが声を掛けてきた

「あ、今フェイトさんからちょっと用事を頼まれただけですよ♪じゃあ、いってくるですよ～」

side out

湊side

「…な…さん、…きて……さい」

ゆさゆさ

「ん？……なんだ？」

体を揺さぶられる感覚で俺は目を覚ました

そして目が覚めて最初に目に入ったものは

「あ、やっと起きたですね♪」

エリオやキャロ位の背丈になっているリインだった

「リイン、それはアウトフレームのフルサイズか？」

「よく分かりましたね、正解ですよ～♪」

リインが昨日あった時と同じサイズに戻りながら言う

「で？俺に何か用があるんじゃないのか？」

「あ、そうでした。フェイトさんから湊さんを訓練所に連れてきてくれるよう頼まれたですよ」

「分かった。何処にあるか教えてくれ、着替えてから行くよ」

その後、部屋にあった訓練用のスポーツウェアに着替えてリインに教えてもらった場所に向かった

訓練所に着くとＦＷ陣に何やら説明をしているところだった

「お～い、フェイト来たぞ～」

「ゴメンね湊。いきなり呼び出したりして」

「気にするな。おおかた俺を皆に紹介するついでに、俺の腕前を確かめるつもりなんだろ？」

「あはは。バレてるみたいだねフェイトちゃん」

俺がフェイトと話していると栗色の髪をサイドポニーにした女性が苦笑しながら話しに加わってきた

まぁ、栗色の髪の時点で分かった人も多いでしょう。そう、この栗色の髪の人こそちまたで話題の管理局の白い悪魔――――いや、魔王のなのはさんです

「あの……君、今なんか失礼な事を考えなかった？」

ヤバイ！眼が少し攻撃色になっている！仕方ないここはっ！！

「違うよ。ただ綺麗だなぁ、と思っただけだよ」

フッ。危ない危ない。危うくＳＬＢを喰らうところだった

「～～～～～～～～／／／／」

なのはを見ると何故か顔を赤くして下を向いていた

あ、なんか既視感(デジャブ)

「お前、スゲェーな」

何故かヴェータにそんな事を言われた

閑話休題

「じゃあ、湊君がどれだけ出来るか見てみよっか」

なのはの思考能力が回復するのを待っている間に自己紹介を済ませ（その時何故かティアナやスバルも顔を少し赤くしていた）、今から俺はフェイトと模擬戦をすることになった

俺達が模擬戦を始めようとしていると

「待ってくれテスタロッサ」

そんな言葉が飛んできた

声が聞こえてきた方を振り返るとピンク色の髪をポニーテールにした凛々しい女性がこちらに歩いてくる

「どうしたんですかシグナムさん？」

「いや、そいつとの模擬戦を私に譲ってくれないかと思ってな」

「別に良いですけど……どうしてですか？」

「そいつから強さを隠している者の気配を感じてな」

そう言い、不敵に笑うシグナム

バトルマニアの嗅覚———恐るべし

で、そんなこんなで結局シグナムとの模擬戦が決定した

正直……逃げたい（涙）

第二話：機動六課と介入者と戦闘狂と（後書き）

湊「……おい作者」

作「ここではアスラと呼んでくれ」

湊「じゃあ、アスラ」

ア「なんだい湊君？」

湊「どうして俺とアノ戦闘狂（バトルマニア）が戦うことになってんだ？」

ア「それは―――」

湊「それは？」

ア「他の皆様の作品では定番みたいだからなんとなく入れてみた」

湊「なんとなく？」

ア「うむ、なんとなくだ」

湊「そうか、なら……」

と言いつつ聖剣を取り出す

ア「一応聞くが……何故エクスカリバーを取り出して私に向けて構える？」

湊「逝っちまいな」

ア「いやいや、字が違うから。それから生き生きとした顔で剣を振りかぶらないでくれるかな？（汗）」

湊「エクス（約束された）――」

ア「おい！湊っ！早まるな！！」

湊「カリバァァアアアアア！！（勝利の剣）」

ア「ギャアァァァァァ……次の話しも…よろしく……ね…（カク）」

第三話：烈火の将ＶＳ（自称）錬鉄の剣士（前書き）

文才が無いので戦闘シーンを書くのに苦労しました

とりあえず出来たのでどうぞ

第三話：烈火の将ＶＳ（自称）錬鉄の剣士

と言うことで

「逝くぞ、神裂」

「……シグナムさん。字、間違ってますよ」

訓練所を廃棄都市に変更して（知っていたが、目の当たりにするとやっぱりビックリ物だった）道の真ん中で向き合っている状態だ

「はぁ、アーチャー……」

《やっと私の出番かアスラよ》

すまんなアーチャー。お前の存在をうっかり忘れていてな

《ほぅ……私が居なければ物語を書きやすいと言うことか？》

まぁ、ぶっちゃけた話そうだね

《残念だったなアスラよ。すでに私は物語の歯車として埋め込まれてしまったのだよ》

フンッ！分かってますよ。ほら、湊が呼んでるぞ

《分かっている……なんだマスター？》

「お前……誰と話してたんだ？」

《アスラだが？》

「そうかあの野郎、こんな時まででしゃばるか」

《許してやれマスター。あいつの存在意義が無くなる》

「どんだけ存在意義がすくねぇんだよ」

《それよりマスター、そろそろ始めないと相手に申し訳がないぞ》

アーチャーに言われてシグナムさんを見ると、すでにバリアジャケット……いや、騎士甲冑を纏っていた

そして手には己の愛剣を持ち、切っ先を軽く俺に向けている状態で俺を待っているようだ

心なしかシグナムさんの眼が物凄く輝いて見えた

「……なぁ、アーチャー」

《なんだ》

「今すぐシグ…もとい、この模擬戦から逃げたい」

《……》

「……アーチャー？」

いきなり喋らなくなった相棒に声を掛けると

《……ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．》

「なッ！？アーチャー！！」

《ｓｅｔ　ｕｐ！！》

返ってきたのは、地獄えの後押しだった

あっという間にバリアジャケットを全身に纏わせて、マスターからの『よくもやってくれたな』と言う様な視線を無視してあえて言う

《いい加減現実を受け止めろ、コレはもう声を掛けられた時点で避けられぬ道だ》

それを聞きはぁ～、と深い溜め息をついて、頬を叩き、気持ちを入れ換える

「よし……じゃあ逝きますか！」

《マスター、貴方も字が違うぞ》

なんかアーチャーに言われたが気にしない

「さてと、シグナムさんと戦うならコレがいいかな」

軽く体を動かしてから、シグナムに向き直る。左手を前に軽く突きだし、その手のひらにミッド式の魔方陣を展開し、そこから刀を引き抜く

引き抜いた刀は、皆様ご存じの方も多いでしょう。ブリーチの阿散井恋次の斬魄刀、刃節を伸縮させられる刀、［蛇尾丸］です

え？この刀を選んだ理由？

面白そうだからです♪

俺は蛇尾丸を正眼に構える

「剣の騎士、シグナム」

シグナムが俺の準備が整ったのを確認すると己の二つ名を名乗る

俺にはそんな呼び名は無いが、ノリでやる

「錬鉄の剣士、神裂湊」

ここまで言うと不思議と次に言うべき事が自然と口に出た

「「参じて……参る！」」

今、剣の騎士と自称錬鉄の剣士の戦いが開戦した
先に仕掛けたのは湊
「はあっ！！」
シグナムに駆けていった勢いに足の裏に溜めていた魔力を爆発させて得た勢いを加え一気にシグナムに接近する
その速度を殺さずに体全体を使って回るように横に刀を振るう
「ッ！？」
湊の速さが予想していたよりも……いや、フェイトの速さすら超える速度を目の当たりにして驚愕するが、振るわれた斬撃を己の愛剣で弾きかえす
斬撃が弾かれたと感じると湊は即座にシグナムから距離をとる
しかし、それを許すシグナムではない
離れていく湊に飛び込んでいく様にシグナムは神速の突きを繰り出す
「ぐっ！？」
それを危なげに防ぎながら湊は思う
なんて重く強い斬撃だ、と

しかし

「はあああああ――――っ！！」

つばぜり合いになっていた己の刀を一瞬引き、角度を変えて刀の刃にシグナムの剣を引っ掻けて力の流れを変える

すると

「なぁっ！？」

シグナムが後方にあったビルに投げ出された

端から見たらまるで自分から飛び込んでいったような、奇怪な動作で。

ドゴォッ！！

シグナムは投げ出された速度を落とす事も出来ずビルの壁に激突し、それでも止まらず壁を破り中に消えていった

なのはｓｉｄｅ

時は少し遡り模擬戦開始前

私達はシグナムと湊君を残して模擬戦を観戦出来るビルの屋上に移動した

湊君達の様子をモニターに映し出して、その一つを見たフェイトちゃんの口からこんな事が聞こえてきた

「あ、シグナムの眼が輝いてる（汗）」

その言葉に釣られてモニターを見ると確かにシグナムさんの眼が物凄く輝いていた

ん～～～、シグナムさんに模擬戦の相手を任せたのは失敗だったかなぁ？

と、ちょっと後悔しているとスバルに声を掛けられた

「あの～なのはさん。湊さんって強いんですか？」

「ん～強いとは思うんだけど対人では分からないかな」

私が言った内容に気になった物があったのかティアナが疑問の声をあげる

「対人って事は湊さんはガジェットと戦ったんですか？」

「うん。フェイトちゃんが見たみたいなんだけど、ガジェット５０機位を一撃で撃墜させたみたいだよ」

「「「「５、５０機ッ！？」」」」

私の話を聞きＦＷ陣は口を開けたまま固まっていた

「そんな事より皆、模擬戦始まりそうだよ？」

フェイトちゃんがモニターを見ながら模擬戦が開始しそうな事を告げる

その声に反応して、固まっていたＦＷ陣はモニターを見る

私もフェイトちゃんの発言に苦笑をしながら視線をモニターに向ける

モニターを見ると丁度湊君が仕掛ける所だった

「速い……」

モニターを見ている中の誰かの呟きが聞こえた

うん、本当に速い。多分フェイトちゃんより速いかも知れない

だが、湊君の斬撃はシグナムさんに弾き返された

「やっぱりシグナムさんは凄いなぁ」

「うん、私だったら今の一撃は防御出来ても崩されると思う」
フェイトちゃんが正直な感想を言う
モニターではシグナムさんが湊君に突っ込んでいくのが見える。それを湊は危なげに防いだ
すると、一瞬だけ湊君がシグナムさんの剣から刀を離したかと思うと、シグナムさんの剣を引っ掻けた
それだけなのにシグナムさんは湊君の後ろにあるビルに突っ込んでいった
「凄い」
フェイトちゃんがそう漏らすと、隣に居たエリオが質問してくる
「あの、フェイトさんは今、湊さんが何したのか分かったんですか？」
「え？うん」
「湊さんはアレをどうやったんですか？」
エリオの次にキャロが聞いてきた
「えっとね。湊はちょっとシグナムの力の流れを変えただけだよ」

それを聞いて私は思った

フェイトちゃんもう湊君と戦う時の事を考えてる、と

「あ、シグナムさんが出てきましたよ」

モニターを見るとエリオの言うとうり、突っ込んだビルからシグナムさんが出てきた

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

湊ｓｉｄｅ

やっぱりあれ位じゃあ何のダメージも無いか

シグナムがビルから出てくるのを見ながら俺は同じ高さまで高度を上げる

「面白い技を使うな神裂」

「あんまり効かなかったみたいだけどな」

シグナムが笑っているのでやれやれ、と言った様な仕草をする湊

「受けてみろ神裂！！」

そう言うとシグナムはいつの間にか取り出した鞘に剣を納刀して居合い抜きの構えを取る

「レヴァンティン！」

《Ｓｅｒｐｅｎｔ　Ｆｏｒｍ！》

シグナムの掛け声に答えるように鍔に付いているコアが少し回転し、カートリッジを一個排出する

剣を鞘から抜くと連結刃になっており、炎を纏っていた

「飛竜――」

シグナムは鞭を操るように振るう

もちろん俺もそれをただ見ていたわけでわない

俺は蛇尾丸を振り上げこちらも炎を刀身に纏わせる

纏った炎の色は――――黒

「吠えろ！――」

シグナムが振るうのと同時に振り下ろす

「一閃！！」
「蛇尾丸！！」

シグナムの斬撃を蛇尾丸で相殺するが……

バキッ！

シグナムの斬撃を完全に相殺する事が出来ず、蛇尾丸が砕ける

「チッ！」

即座に蛇尾丸を消し、次の武器を創造する

しかし、そう簡単に武器を取り出させるシグナムではない

湊の刀が砕けた瞬間に刀身を元に戻し、武器の無い湊に切りかかる

「紫電一閃！！」

シグナムの一撃が振り下ろされる刹那の時間に考える

避けるにはもう遅い……ならっ！！

「真剣っ！白刃取り！！」

魔力のオーラを手に纏いレヴァンティンを挟み込むように掴む

「なっ！？」

シグナムが湊の無茶ぶりに驚愕する

それで出来た隙を使いさっきもやった方法でシグナムをあらぬ方向へ投げ飛ばし、今度こそ武器を創造する

創造するのは某正義の味方が愛用した陰陽の双剣［干将・莫耶］

創造した双剣を構えてシグナムに宣言する

「シグナム、次の攻撃速度に着いて来られなかったら俺の勝ちが決まるぞ」

「良いだろう。来い神裂！！」

俺の宣言を聞き、シグナムは俺を迎え撃つために構える

まぁ～次の攻撃で終わらせるつもりだから全力でやるけどね

「行くぞシグナム……御神流、歩方の奥義『神速』！」

そう呟くとシグナムの目の前から湊が消える

シグナムは冷静に湊を探そうと周りに視線を移そうとすると

「ここに居るぞ」

「ッ！？」

突然背後から声が聞こえてきた

すぐ振り向きながらの斬撃を放つが一瞬で消え

「ハアアアアア！！」

また背後に現れ、斬撃を放つ

それを繰り返すうちにシグナムが体勢を崩す

その一瞬で接近し剣を突きつけながらシグナムに言う

「俺の勝ちだよな？」

「……ああ、お前の勝ちだ」

こうして、自称錬鉄の剣士は

烈火の将に勝利した

第三話：烈火の将ＶＳ（自称）錬鉄の剣士（後書き）

アスラ「湊、喜べ。この後書きに雑談コーナーを設ける事になった」

湊「へぇー、満足に小説を書ける文才の無いお前がねぇ」

アスラ「ぐっ！？本当の事だから言い返せないっ！」

湊「じゃあ、この話は白紙に戻せ。ただでさえ本編書くのも苦労してるくせに」

アスラ「断固辞退する！」

湊「無駄に迷言を使うなっ！！」

アスラ「フッ、無駄に迷言を使うのが私の生き甲斐だ」

湊「なんだその無駄な生き甲斐は！？。後、そんな言ってやったぜみたいなスッキリした顔しないでくれる！」

アスラ「五月蝿いな、少しは黙ったらどうだ湊君？」

湊「お前に魔力全開のスターライトブレイカー俺式を撃ち込みたいっ！！」

アスラ「いや、流石にそれは私が死ぬので止めてくれ」

湊「……全力全壊」

アスラ「言ってる側から実行しないでくれるかな」

湊「スターライト――――」

アスラ「湊っ！止めろっ！！流石に全方位からＳＬＢ撃たれたらいくら私でも死んでしまうっ！！」

湊「ブレイカァァァァァァァァァァァ！！」

アスラ「ギャァァァァァァァァァァァァァァァ！！！」

終わりｍ（｜　｜）ｍ

第四話：介入者、女になる！？（前書き）

どうも、作者のＡｓｕｒａ＿Ｃｒｙｉｎです

この駄作を読んでくれる皆様
本当にありがとうございます
ｍ（＿＿）ｍ

第四話：介入者、女になる！？

何故か俺はベッドに寝かされていた

うん、分かってるよ。こんな始まりかたしか出来なくてゴメン、でも話は続けさせてもらうよ

さっきも言ったとおりベッドに俺は寝かされていた。

寝かされていた理由は、慣れない力を使いすぎた為倒れたらしい

うん、それだけなら別にあり得る事だから気にしないよ。そう本当にそれだけなら……ね

とりあえず言っておく。俺の性別は男だ。例え髪が長くて、体つきも女に近くて、更に女顔でもちゃんとした男である

なんでこんな事を言い出すのかと聞かれると……その、なんと言うか、答えにくいんだが……

いつの間にか俺こと神裂湊は――――――女になっていた

いきなり何言ってんだコイツ？とか思った人は普通の人です。この俺……と言うか［私］が保証する

だって普通はその反応が正解だもん

でもな、眼を覚ましてから何か異様に声が高かったし、何か肌がきめ細かいし、オマケに男にはまずないはずの豊かな双丘が――――見事に存在してる訳ですよ

それを認識するのに数十分掛かりました

なんとか今の状態を認識してまず鏡を見ました。

鏡の中には見知らぬ美少女が居ました。自分で言ってて悲しくなってきたよ

とりあえずその鏡に映った俺……私の容姿は、碧銀の髪、右目が紫、左目が蒼の虹彩異色

なんと言いますか……この姿は――――――覇王？

《マスター、その姿は間違いなく覇王の姿だぞ》

「……アーチャー私は何時からこの姿になったんだ？」

ベッドの隣にある机に置かれているアーチャーを腕に着けながら聞く

《あの模擬戦が終わった後、マスターが倒れたのは教えたな》

「ああ」

そこら辺は起きると同時にすぐ聞いたからな

《マスターが急に倒れたのでこの医務室に運ばれたんだが……》

「運ばれたんだが？」

《マスターの体が発光し出してな、ものの数秒で女体化したと言う訳だ》

「……原因は？」

《……神のミスとしか言えん》

「……あの神は———天然か？」

《十中八九、天然だろうな》

あの野郎……

「とりあえずアーチャー」

《許可する》

「いやいや、まだ何も言ってないよな？」

《大方、某不幸高校生の様に叫びたいんだろ？》

この野郎なんで分かったんだ？

《勘だ》

「思考を読まれてる！？」

《む、誰か来たみたいだぞ》

「そこでスルー！？」

と、漫才？じみた事をしていると金髪のおっとりした女性、シャマルが声を掛けてきた

「目が覚めたみたいね。気分はどお？」

「気分は良いんですけど……体が……」

シャマルの問いかけに答えるが体の事になると何かが終わったと言ったような顔になる

「あ、君が女の子になってる事は皆は知らないわよ」

「え？貴女以外は知らないんですか？」

何故報せていないのかを聞くと

「だってその方が楽しいでしょ？」

と返答された

「……楽しいのは貴女だけだと思いますが？」

ちょっと睨みながら言うと

「さて、そろそろ皆に披露しに行きましょうか」

物の見事にスルーされました

色々と言い返そうとしたら狙ったようなタイミングで俺のお腹がなった

恨むぞ俺の腹

そんなこんなでシャマル（医務室を出る時に自己紹介はすませた）に手を引かれて食堂に連行されている最中です

何故かすれ違う人達の視線が俺に釘付けです。正直物凄く恥ずかしい……

機動六課食堂

「まずはお昼ご飯を取ってきましょうか。湊君、ここに来て朝ごはんを少ししか食べてないから結構お腹空いているでしょ？」

にっこりと笑うシャマルの言うとおりメチャクチャお腹が空いている。なので、シャマルと一緒にお昼ご飯を取りに行った

取りに行った感想

何故か大半が地球の料理でした

とりあえず俺は和食のAランチ（白いご飯、サンマの塩焼き、味噌汁）を、シャマルはスパゲッティを受け取り、今は席を探しているところだ

……嫌な予感

「あ、あそこが空いてるわね。行きましょ」

シャマルが見つけた席に行くと

「あ、シャマルさんと……」

案の定、なのは・フェイト・はやての三人が居た

ちなみにシャマルに声を掛けてきたのはなのはです。途中で言葉を切ったのは俺が見知らぬ人間だからだろう

「えっと、名前を教えてくれないかな？」

ちょっと困惑顔のなのは

さて、困った。正直に女になっちゃいました、なんて言えるわけが無いし。違うな、言えはするんだが……俺の……男としての何かが失われる気がするんだよな

「あの～名前を教えて欲しいんだけどぉ～」

なのはの声で我に帰ると、何故か上目遣い＋微妙に泣きそうに潤ませた目が俺を見ていた

うぅ！そんな顔されたら――――

「あ、ごめんなさい。神裂湊です」

素直に返してしまうだろうがぁぁぁぁあああ！！

「あ、なんだ。湊君だったんd……って、えぇぇぇえええええっ！！」

予想外の出来事によりなのはは混乱した！

「ど、どうしたのなのは！」

そこに、なのはの声にビックリしたフェイトが慌ててなのはを落ち着かせる

「どないしたんなのはちゃん？」

こちらもなのはの声にビックリして話し掛けてきたはやて

魔o……なのはさんが落ち着くまでしばらくお待ちください

「とりあえず湊君、なんか原因に心当たりはあるかぁ？」

「いや、全然」

実は神様のミスなんです。なんて言えるわけがないよな。はぁー

とりあえずなのはが落ち着いたので、今は俺がこうなった原因を皆で考えているところだ

本当に女になっているのか三人に聞かれたシャマル曰、完全に身体の作りが女性のモノになっている。とのこと

男は辛いよ……いや、今は女か

俺は皆の話し合いに参加せず、もしも神様にまた会えたときにどう辱しめてやろうか考えている

そんで色々考えていると

（うにゃっ！？それはダメ！恥ずかしくて死んじゃうっ！！）

神様の声が聞こえてきました

そうか、恥ずかしいか？ならこれでどうだ

更に恥ずかしいモノにしてみると

（うぅ！？ひゃっ！？もうやめてぇ！お嫁に行けなくなるぅ！！）

更に更に恥ずかしいモノにする

（本当にやめてぇ！もう私のライフは０なのっ！！何でも願い事叶えてあげるから！）

良いことを言ってきたので止めてあげる

ならアーチャーを改造するための答えを出す者（アンサー・トーカー）をくれ。アレは二次小説でしか知らないから

（もう私をいじめない？）

ああ、ついでに俺の現状を説明してくれ

（それは……）

それは？

（……あは♪）

そうか、またミスったか

（はい！すいませんでしたっ！！）

はぁ。戻れるか？

（一応直そうと思ったんだけど……ランダムで変身って感じになっちゃったの）

とりあえず答えを出す者［アンサー・トーカー］は大丈夫か？

（うん、大丈夫だよ。ちょっと時間が掛かるから後で力を着け終えたら知らせるね）

ああ、頼んだ

神様との交渉が終わり、なのは達の話し合いがどうなっているのか様子を見ると

「湊君は私たちと寝るの！」

「そうだよ！私となのはと湊の三人で寝るの！」

「ちゃうっ！！湊君はウチと寝るんや！」

何故か俺と寝る話しになっていた

「……てっ！？お前たちは何を話あってんだぁ！！」

俺が女になった原因を考えてたんじゃないの！？

そんなことを心の中で叫んでいると、不意に肩を誰かに叩かれた

「ん？なんだシグナムにヴィータ」

俺が二人に聞くと、何かをさとった顔で

「「諦めろ」」

と、言ってきやがりました

もう誰も助けてくれそうに無いので自分で説得しようとすると

「「「湊（君）私たち（ウチ）と寝るんだぁ（やぁ）！！」」」

すでに戦闘が始まっていました

とりあえず終わったら呼んでくださいとシグナムに言い、訓練所に向かった（ついでにシャーリーを捕まえて）

機動六課　訓練所

とりあえずどのくらいこの身体（女）で暴ｒ……もとい出来るか神様の連絡を待つ間試してみる

「じゃあ、シャーリー頼む」

「分かりました。行きますよー」

シャーリーがそう言うと同時に目の前に十個の魔方陣が現れ、カプセル型の機械――――ガジェット?型が魔方陣から出現する

「よし、アーチャー」

《ｓｅｔ　ｕｐ!》

光が晴れるとバリアジャケットがＦａｔｅのアーチャーの礼装ではなく、セイバーの青い騎士王の甲冑になっていた

ひとまず王の財宝［ゲート・オブ・バビロン］が使えるか試す

今の格好に合わせて約束された勝利の剣［エクスカリバー］を取り出す

……物凄く簡単に出てきちゃいました

更に勝利すべき黄金の剣［カリバーン］も出して、風王結界［インビジブル・エア］を両方に使ってみる

……うん、本当に見えなくなった

俺がのんびりやっているとガジェットが一斉に攻撃してきた

それを足の裏に一瞬で貯めた魔力を爆発させて一番前に居るガジェットの懐に入ることでかわす、ちゃんと目の前のガジェットを真っ二つにする事は忘れずに

真っ二つにしたガジェットの間を駆け抜けながら続けざまに三機のガジェットを切り裂く

切り裂くやいなや、今まで沈黙していたガジェットが一機を残して分散し始めた

とりあえず残されたガジェットの攻撃をかわしながら接近し、ガジェットを三枚におろす

そして次に近場のビルの屋上に移動して残りのガジェットを探す

「どこに居るのかな～♪」

こんなことを呟きながら

ガジェットを見つけると剣をしまい、新たに王の財宝［ゲート・オブ・バビロン］からＧＮスナイパーライフル？を取り出す

……なんでこんな物まで入っているのかは気にしないでくれ、基本色々入っているみたいだから

気をとりなおして目標を捜すが……

建物に隠れたみたいで何処に居るのか分かりません　ＯＴＺ

俺が嘆いていると、相棒が救いの手？を差しのべてきた

《マスター、鉄の闘争代理人の力を使えばいいんじゃないか？》

「それだっ！サンキュー、アーチャー！」

すぐさまＧＮスナイパーライフル？を構えながら能力を引き出す為に目を瞑り意識を集中する

イメージ的には目を開いたら自分は戦闘マシン、的な感じ

集中していると、今まで別々に機能していた五感が同時に機能しは

じめる

それを感じ取ると、俺は目を開く

多分今の俺の目は深紅に光っているだろうな

今俺が発動している能力はＣＡＮＡＡＮのカナンが持つ［共感覚］

この能力の良いところは２つある

１つは余計な感情を殺すことが出来ること

もう１つは……

「……見つけた！」

今、俺の目には建物に隠れているガジェットが淡い水色の状態で視える。壁を透かして

それに狙いをつけてトリガーを連続で五回引く

射ち出された魔力弾は寸分たがはずガジェットのカメラを撃ち抜く

……このように感情を色覚化するところ

ガジェットが淡い水色だったのは俺に敵意があったからだ

それにしても何故ガジェットの感情が視れたのかな。今考えると機械だから感情は無いと思うんだけど

ま、デバイスに感情があるくらいだから別に不思議じゃないか

それにしても……

あぁ～、狙い撃つのは楽しいぃ～♪

第四話：介入者、女になる！？（後書き）

湊「……おいアスラ」

アスラ「なんだい湊君？」

湊「とりあえず消えてくれ」

アスラ「あははっ！笑える冗談ありがとう。冗談ついでに手に持っているごっついサバイバルナイフを私につけないでくれないかな？」

湊「……確か此処ではお前は不死なんだよな？」

アスラ「ああ、そのとおり！此処では私は不死なんだよ。まぁ、痛いものは痛いｇ――ちょっと待て。何故そんなに素敵な笑顔なのに凄まじいプレッシャーを放つのかな？そして何故無数に刃物やら鈍器を召喚しているんだい？（汗）」

湊「……投稿が遅れた罪、その身で償え」

アスラ「ま、待てっ！！遅れた事にかんしては反省している！だからそれは止めてｋ「発射（て）――っ！！」だから止めｔ――ぎゃぁあああっ！痛いっ！！槍や刀に混じって棍棒とかバットとかの鈍器が当たって全身がっ！爪先から頭の天辺までのあらゆる部分に激痛がっ！鋭い痛みと鈍い痛みのコラボレーションが新境地を切り開いているようなっ！？」

湊「そうか。ならばもっと増やしてやる」

アスラ「いやぁぁぁあああああああグフっ！……」

湊「やっと死んだか。……ん？なんだお前は？いや、よく視たら読者か。すまない見苦しい所を見せたな。とりあえず此処まで読んでくれて感謝する（ぺこ）こんな駄作だが、０．０１？位でも楽しんでくれれば幸だ。また次回会おう。今度は何ヵ月掛かるか分からんがな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7684j/

魔法少女リリカルなのはStrikerS チートな介入者

2010年10月15日21時36分発行